

2016年度中国青年メディア関係者代表団第2陣 参加者の感想（抜粋）

【第1分団】

○日本の報道界への印象が強く残った。日本経済新聞社、NHK、新潟日報社などの視察を通じて、日本の同業者たちが全く手を抜かずに、命がけで仕事に取り組んでいる姿を目にした。中国のメディアと比較すれば、日本のメディアはネットメディアの影響がまだ小さく、報道界ではニュース報道そのものに注力し、新鮮で正確なニュースを国民に提供することに尽力している。特に新聞社を視察した際には、新聞社と読者との間に良好なコミュニケーションがあることに注目した。まさに中国で常に語られる“内容が主役”である。今後、自分も日本のメディアの経験を参考にし、中国でより良い報道をしていきたいと思う。

日本の製造業は世界に名を馳せており、私の今回の訪日の目的の一つも、日本の製造業のサクセスロードの探求であった。玉川堂の鋳起銅器職人の一徹な姿はまさに敬服の極みである。15年の修行を経て、やっと一人前の職人と認められる。200年の時、代々の継承、緻密な研鑽など、どれも忘れ難い内容だ。この一意専心の精神は、藤次郎株式会社でも見ることができた。職人たちは工房で各自の作業に専念し、会社の担当者は自信を持って「私たちは世界NO.1です」と語っていた。似たような言葉は、訪日期间中に耳にした。自信、専心、堅守、これらが、日本の製造業の成功の道だと、私は思う。

このほかに印象深いのは、日本人の環境保護意識である。日本人は細かな部分にまで注意を払い、環境保護と資源の節約を最大限まで高めて、日本という国をよどみなく機能させ、すべての場所を気持ちの良い空間にしている。クールジャパンについては、これからもさらに時間をかけて研究する価値がある。帰国後は、家族や友人に“クールジャパン”を紹介したいと思う。また、家族や友人の多くが日本に来て見学や学習をしてほしいと思う。

この機会をお借りして、日中友好会館の温かいおもてなしに心から感謝したい。日本の友人たちも中国への見学や旅行にお招きし、相互理解を促進したい。両国の末永い友好を期待する。

○日本のメディアは職業意識が高く、業務に専心している。さらに、国民のイメージ向上と知識の普及を非常にうまく行っており、技術面での緻密さだけでなく、感情面や誠意という面で、いっそう学び参考にするべきだと思う。

さらに、私自身かつては新聞の編集を担当し、現在はネットメディアに従事する者の一人として、今回の意見交換で知った日本の読者の新聞へのこだわりには、まさに驚かされた。日本経済新聞のような全国紙が数百万部を発行しているのには不思議はないが、新潟日報のような地方紙で、しかも、県人口は200万人余りにもかかわらず、50万部近い発行部数がある。このような定期購読部数比率は、中国の同業者からは驚きとしか感じられない。

一言いいたい。このような読者の皆さんがいて、日本の同業者たちは本当に幸せだ！

○8日間という短い訪日だったが、これまで書籍でしか知らなかった日本を知ることができた。最も印象深いのは、神楽坂での自由取材と玉川堂の訪問である。神楽坂での自由取材で、我々は100年以上の老舗として日本の伝統的な手工芸品を販売しているお店にお邪魔した。店員との30分近いインタビュー

を通じて、日本の伝統工芸者たちの持つ自らの製品への揺るがぬ自信を強く感じた。彼らの持つ開放的且つ柔軟な精神を感じ、伝統文化の継承と発展に対するありありとした信念を感じた。新潟県燕市では、著名な“鋤起銅器”製造者の玉川堂を訪問した。ここで私が感動し忘れられないのは、わずか二十数名の職人たちの“作業場”でありながら、世界に名だたる銅器が製造され、さらにそれが日本の“人間国宝”と認められていることであった。工房の職人たち一人一人の技術に対する専心ぶりに、深く感動した。こうした専心の魂は一時だけでなく、十年、数十年と続いている。長年の地道な作業の継続が、小さな工房の名声を世間に広めたのである。日本の伝統文化の継承と保護が心の隅々にまで尽くされていることに、感動を覚えずにいられない。中国でも昨今、“職人魂”が提起されているが、我々は日本から伝統文化の継承と発展の経験を学ぶ必要がある。

“クールジャパン”、感動、驚き、忘れられない！

○今回の訪日で最も印象深いのは、やはり日本の一般市民の生活に対する真面目さと粘り強さである。特に、自由取材で100年の歴史を持つ老舗にお邪魔した時、店主が店の製品の陳列や装飾をあれほど懸命に、綿密に行っていたことに感動し、70歳の年齢でもどれほど自身の仕事に情熱を持っているかと、気持ちを感じ取った。

仕事を楽しみ、楽しく生活する、これはおそらく一人一人が求めるものだろう。日本の風景や風習もぜひ皆に推薦したい。

【第2分団】

○1. 専門分野：今回の訪日では、我々は日本テレビと東奥日報社の業務について、理解を深めた。既存メディアの分野では、中国が直面している問題と相似しており、ニューメディアへの対応と自社メディアのプラットフォームの発展においては、中日のメディアが直面している課題は相似していることを知った。だが、東奥日報社での意見交換で、テレビ局に勤める私自身にも、多少の知識の収穫があった。情報の受け手を自社メディアとしてしまう方式で、これは受け手の参加度合いを高めるだけでなく、報道内容に趣味性を増やすことになる。東奥日報社は子供たちを参加させることによって潜在的な読者層を育成しており、この方式は既存のペーパーメディア部門をより長期的に発展させることができる。

2. テーマ分野：第2グループのテーマは教育である。これに基づき、我々は千駄木幼稚園と青森県立百石高校で視察と意見交換を行った。日本の教育では心身の発達と精神の育成に重点が置かれ、それが一貫して教育に貫かれていることを知った。学校では郷土に関する活動が行われ、生徒たちに郷土を誇りとし、身の周りのすべてを大事にすることが教えられている。これは称賛に値することである。

○来日前の日本の印象は、清潔で秩序正しく、人々は上品で礼儀正しく、熱心に仕事をする、というものだった。来日後、東京で幼稚園やキッザニア東京の視察、そして本州最北端の青森県で県教育委員会の講義や県立百石高校の視察を行うことで、その原因を教育の中に見出した。日本では、子供は家族の一人であるだけでなく、社会の一員である。幼稚園の頃から、日常の遊びの中でさえ、子供の自己発見能力や潜在力を養い、他人の特徴や優れた面を理解させ、社会生活での仕事に必要な能力を教えている。こうした基礎があって、日本の生徒は自らを理解し、自分の故郷を愛し、将来の職業を明確にしていくのである。中学や高校の教育では、学校が仕事の技能や人間関係に対する専門指導を行い、生徒たちに、

社会に貢献し自らの知識や能力を人々のために発揮する意識を養っている。明確な自己評価があり、明確な職業の目標があることで、持久力のある行動力と緻密で完璧を追求する社会意識が生まれるのである。さらに重要なことは、彼らは自らが仕事に尽くすことを望み、それを誇りとしていることである。

また、青森県立百石高校を視察した際に、幸運なことに私は3年生の授業で杜甫の『絶句』を中国語で朗読する機会を得た。生徒たちは拍手喝采で私への敬意を示してくれた。7日間の日本でのプログラムを通じて、日本の子供たちや一般市民に対する理解を深めることができた。

○強く印象に残ったことは、日本では職業意識の育成を非常に重視しているという点である。視察をした幼稚園や職業体験施設、高校など、どこでも職業意識に対する専門的な教育環境があった。キッザニア東京には、消防士、医師、ガイドからピザ販売店まで、それぞれの職業に応じた専用の仕事場の情景がセッティングされていた。子供たちは職業を演じることで両親や他の人々の働く意義や価値を体験し、体験する過程で職業意識が育成される。

視察をした青森県立百石高校では、職業に従事する学習として、通常の科目やクラブ活動、インターンシップを通じて、仕事の上で必要なマナーを学んでいる。こうした多元的なマナー教育があるため、グローバル化や科学技術が発達した現代においても、日本人は伝統や礼儀を維持できるのだということが理解できた。

もう一つ印象深かったのは、日本では子供たちの郷土への誇りの育成を重視しているという点である。こうした育成は知らず知らずのうちに周囲のさまざまな部分に浸透していく。青森県到着後に受けた、県教育委員会の職員のブリーフィングによると、当地の学校では、自分の郷土の特色や優れた面を理解することを学ばせている。こうした学習を着実にを行うために、教科書だけではなく、学校生活や仕事の環境の中で取り組みがなされている。生徒たちは行く先々で、郷土を感じるのである。しかし、重要なのは、教育によって生徒たちが郷土への愛情を育み、積極的に地元に貢献する意識を高め、それによって自発的に郷土の発展に身を投じるようになることである。

○東京の街は清潔で、車もあまり多くなく、人々は皆とても謙虚で礼儀正しい。これは、来日後の私の日本の第一印象である。毎日のプログラムに参加し、幼稚園やテレビ局、新聞社、高校、そしてその他の多くの場所や景勝地を訪ねるにしたがって、日本に対する私の理解もますます深まっていった。

中国から来ている身として、どの場所でも気持ちの中で両国を比較してしまうことは避けられない。メディアに関しては、日本のメディア従事者の職業意識の高さに本当に敬服する。例えば、日本の政治部門の記者は毎日16時間以上も仕事をしており、青森県の百石高校では、東奥日報の記者が最初から最後まで現場で取材をしていた。また、日本人はニューメディアに対して保守的な態度を示していることも知った。人々はテレビや新聞からニュースを得ることを好んでおり、中国のようにスマートフォンへの依存度がどんどん高まるという傾向とは異なっている。

青森県に滞在中、我々は小グループで自由取材を行い、日本人自身の目から見た自国の魅力を理解した。新鮮市場で海産物の店を営んでいる年配の方は、日本の魅力は四季が明瞭で、物産品が豊かなことだと話してくれた。また、書店で本を見ていた若い女性は、日本の魅力は風景が素晴らしいことと、冬の雪景色がとても美しく、そして誰もが謙虚で礼儀正しいことだと話してくれた。我々は、一人一人の日本人が皆自らの故郷に誇りを持っていることを深く感じた。

中国に帰国後は、上述のような自分の見聞や、私の脳裏に深く刻み込まれている美しい景色を、友人たちと分かち合いたいと思う。

○まず、日本の既存メディアの生存環境をととても羨ましく思う。自分が関係しているメディアの進展ぶりが早すぎるのか、あるいは脆弱すぎるのかは分からないが、既存メディアにとってニューメディアへの対抗はますます厳しさを増している。こうした衝撃と市場経済環境との影響を受け、中国のメディアの広告営業は崩落状態を起こしている。しかし、我々が訪問した日本テレビの広告収入は、逆境にあってもむしろ年々逡増している。簡単な紹介から知り得ただけだが、日本テレビの主要な収入は依然として広告収入であることに非常に驚いた。中国のメディアは経営形態を転換し、知恵を絞ってリアル店舗部分を発展させ、収入不足を補っているのに、日本テレビで広告収入を大きく支えているのは依然として“極悪”な視聴率である。いかにしてNHKに対抗するのかは、依然として公信力であり、権威あるニュース報道プラットフォームとして、日本人の厳格な態度に照らして“声を上げる”ことである。逆に、さまざまな制約を受けて、中国のメディアの公信力は徐々に消失しているのである。

東奥日報社のニューメディアの運営モデルも参考になった。例えば、1. 定期購読をすれば、無料でその後のニュースがスマホでみられる。2. 重要なニュースはインターネットのサイトでも同時進行で報道する。3. 記者のスマホ動画ニュースを他のメディアと共有する、といったことである。

【第3分団】

○今回の訪日で、最も印象深かったのは日本人の真面目さである。真庭市バイオマスツアーでは、担当者が全行程を熱心に説明してくれ、疲れたり面倒がったりする様子は全くなかった。倉敷美観地区で自由取材を行った際、アイビススクエアの店員は我々の質問にできる限りを尽くして回答してくれ、明確に説明できないことにも単純に「わかりません」とは言わず、会社の責任者に問い合わせ、できる限り答えようとしてくれた。岡山市のイオンで買い物をしたときには、言葉が通じない状況でも、店員は自分のスマホの翻訳アプリを使って商品を説明してくれ、会計の時には、十数分もの時間をかけて商品をギフト用にラッピングしてくれた。このような経験は他にもたくさんある。一民族のすべての人が真面目で熱心な態度を維持できれば、その民族の団結力と求心力は比類なく巨大になるだろう。

帰国後、私は周囲の人に伝えたい。確かに中日両国には数十年の戦争の歴史があり、意見の大きく異なる問題も数多くあるが、しかし、日本人の身に備わっている精神と資質は、中国人が敬服するに値するものだということを、否定することはできないのだ。

○日本は古い建築物の保護に力を尽くしており、過度な商業化により歴史的情緒が損なわれるのを防ぐため、古い建築物を最大限保護している。日本は多くの法律条例を策定して貴重な歴史的文化遺産を保護しており、歴史的景観を保護する特別条例も各地で制定されている。関連法の厳密な規定により、貴重な歴史的景観が残されている。文化遺産は日本では“文化財”と呼ばれ、日本では文化遺産は財産と見なされている。だが、これは文化遺産を金のなる木として、目先の経済効果だけを重視するものでは決してない。むしろ重要なのは、遺産に内在する文化を保護し、それによって文化の伝承を実現しているという点だ。日本の各所でインタビューを行ったが、現地の人々は地元の文化遺産を紹介するとき、まるで自分の家宝であるかのように、誇りに満ち溢れていた。これはまさに、郷土を熱愛する感情であ

り、国民と国家との一体感を強く増進するものである。

○①秩序が素晴らしい。東京は人口が密集しているが、道路交通事情はとても良い。ドライバーの運転技術が高く、道路は狭いのにひどい渋滞には一度も遭わなかった。礼儀正しく歩行者に譲る姿に目を見張った。

②環境保護は想像以上に念入りだった。ごみの回収では、ペットボトルはラベル、ボトル本体、キャップに分類するほどであった。

③日本の人々はとても善良で、勤勉で、ホスピタリティがある。私の出会ったすべての日本人、例えばメディア関係者、ホテルのスタッフ、スーパーの店員、地下鉄の職員、一般の通行人すべてが、さまざまな角度で私をサポートしてくれ、心がとても温まった。

④文物の保護が素晴らしい。東京都では、歴史のある文物はすべて登記され、保護されている。しかもそれは一つの基準で一貫しており、非常に効果を上げている。景観の保護や公園の造営でも伝統が守られており、人々の生活を快適にしている、この方法は認める価値の高いものである。

⑤日本の街は非常に清潔で整備されており、東京でも岡山でも倉敷でも真庭でも、どこでも整備された道路と紺碧の空を見ることができ、さわやかな空気を吸うことができた。

⑥禁煙の方法が参考になった。大通りでは、たばこを吸っている人を全く見なかった。禁煙の文字だけ掲げて実際は守らない、ということはなく、各地に喫煙室が設けられ、喫煙者の需要を満たすと同時に、非喫煙者にも配慮されている。

⑦都市建設が勉強になった。インフラ整備だけでなく、地下に張り巡らされた地下鉄網も地下の配管網もすべて経済先進国の水準を示すものであった。

⑧高齢化が深刻である。白髪の高齢者が働く姿が、そこかしこに見られた。

○①日本の既存のメディアは社会の認可レベルが高く、情報発信のメインチャネルである。

②ニューメディアの台頭による影響はあまり大きくなく、中国の5年前ほどのレベルである。人々のニューメディアの使用は、ニュースの拡散よりも交流目的での使用が主体である。

③報道環境が比較的緩やかで、メディアの自由度が高く、著作権がきちんと保護されている。中国はどこでも既存メディアの情報ソースがニューメディアに使われてしまっている。日本の既存メディアには会員制度があるが、中国ではごく一部である。この点は、中国は学ぶべきであり、“無料”環境の中からいかにして転換するのか、十分思考しなければならない。

○新聞社の記者である自分にとって、日本での視察は、ペーパーメディアの将来の発展に大きな自信を与えてくれた。特に、記者の原稿の著作権意識と、読者の新聞を読む習慣の育成について、非常に着目した。ニューメディアの台頭があっても、ペーパーメディアにはまだ数多くの、ニューメディアでは持ちえないメリットがある。メディアの同業者の皆さんの、職業意識の高さに、心から敬服する！